

中耕・広面遺跡墳墓群と供献土器（1）

石坂俊郎

はじめに

坂戸市中耕遺跡とその南西に連続する広面遺跡は、埼玉県の中部、南に武藏野・入間台地地域、北に比企丘陵地域が広がるその狭間、坂戸市西部の沖積地に立地する、古墳時代前期墳墓群を主体とした遺跡である。両遺跡は隣接し、分布の区切れを挟みつつも、内容の共通性から一連の広がりに包括されると言えよう。すなわち、総計約90基の同時期墳墓が、東西500×南北300mの広がりの中で展開する、まれな規模の報告事例である。当地域は、弥生時代後期には吉ヶ谷式土器分布圏の南部にあたり、中部高地的型式を具備しながら縄文装飾を多用する土器様式とともに、墳墓の周溝が「四隅切れ」となる墓制が文化的表徴の一つとなっていた。それが時代を越えて、古墳時代前期まで保持されていたこと、そしてほどなく通例の方墳の形式に変化したことが、当遺跡（中耕・広面両遺跡を一体としての呼称とする。以下同じ）の調査成果により明らかになった。また埋葬主体部こそ失われていたものの、当該遺構でしばしばそうであるように、周溝からは多量の土器が出土している。それらの内容は、古墳時代前期初頭における古式土師器の単純ならざる様相を示すとともに、出土状況からは、葬祭儀礼の具体像等、墓制の細部に関する情報が読み取れる可能性が期待できる。しかし、報告書が間をおかず刊行されてから後、包括的に再論される機会は意外に多くない（福田2000等）。県内で規模・性格が類似するとみられた遺跡としては戸田市鍛冶谷・新田口遺跡（西口1986）がかねてより著名だが、遺構・遺物の内容がしばしば吟味され、近年では低地の周溝遺構の再検討が進められるのにともない墳墓群としての性格が否定されるに至るなど（及川1999、福田2001）、その運命は波乱に富むが、研究を大きく動かすエネルギーの発生源となっていることは確かである。当遺跡にも、熱量で比較すればそれだけの資源が埋蔵されている。評価のどんぐり返しがあり得るとは考えがたいが、抽出・検討されるべき情報は少なくない。そう思っているだけで何年も経ったが、本稿をその取り付き始めとしたい。

一気にまとめるには手に余ったため、恐縮ながら稿を分けた。本稿では遺構のあり方を中心に墳墓群の全体像を整理するとともに、遺物の分析について基準を提示する。次稿では、遺跡内のスポットへ分け入り、遺物の出土状況の精査から、土器群が記録する墳墓群内部の動態について分析を試みたい。さらに次のステップでは、それらの分析を通して他遺跡へ視野を広げること、そして再び墳墓群全体像の評価へフィードバックしていくことの、内外両方向へ向かうこととなるだろう。

なお遺構名の表記は、各報告書の遺構記号を踏襲し、中耕墳墓群では「S R」、広面墳墓群では「S Z」を用いる。これらを古墳時代前期の「方形周溝墓」と評価することは、前代と通底する階層性を端的に言い当てている点合理性を感じる一方、古墳時代の墓制に前代の遺制が化石化しているかのような観念を招きかねず、帰属時期には異論は出ないまでも、同時代の中での評価を妨げ兼ねないように思われる。よって使用は控える立場をとりたい。

1 遺構の分類と傾向

①墳形 これら墳墓が遺構として認識されるほとんどの場合、本来有していたであろう墳丘は消

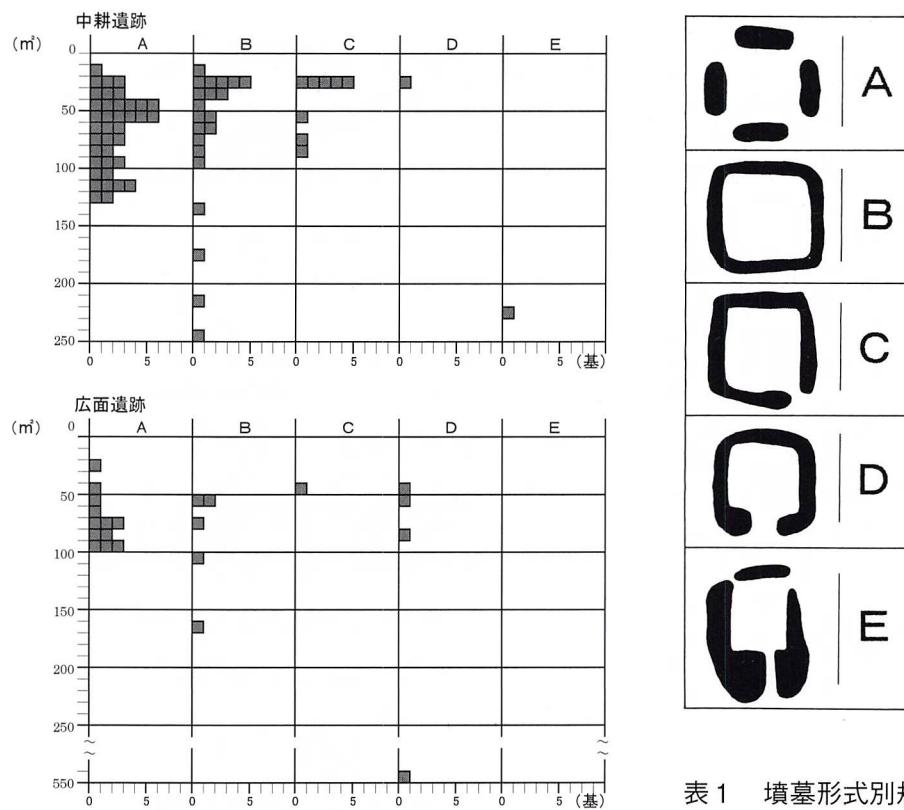


表1 墳墓形式別規模分布表

失しており、墳形の分類は、方形台部を基本としつつも、周溝の四辺・四方の連続・分離に基づいて細分化する。広域を視野に多様な形式を網羅的に配列したカタログは、既にいくつかの論文で提示されているが、当遺跡の状況は、次の5形式に整理される（表1右）。

A形：周溝が四方の各コーナーで途切れる「四隅切れ」形

B形：周溝が全周する「全周」形

C形：周溝が四方コーナーのうち1箇所で途切れる「一隅切れ」形

D形：周溝が四辺うち1辺のほぼ中央で途切れる「一辺中央切れ」形

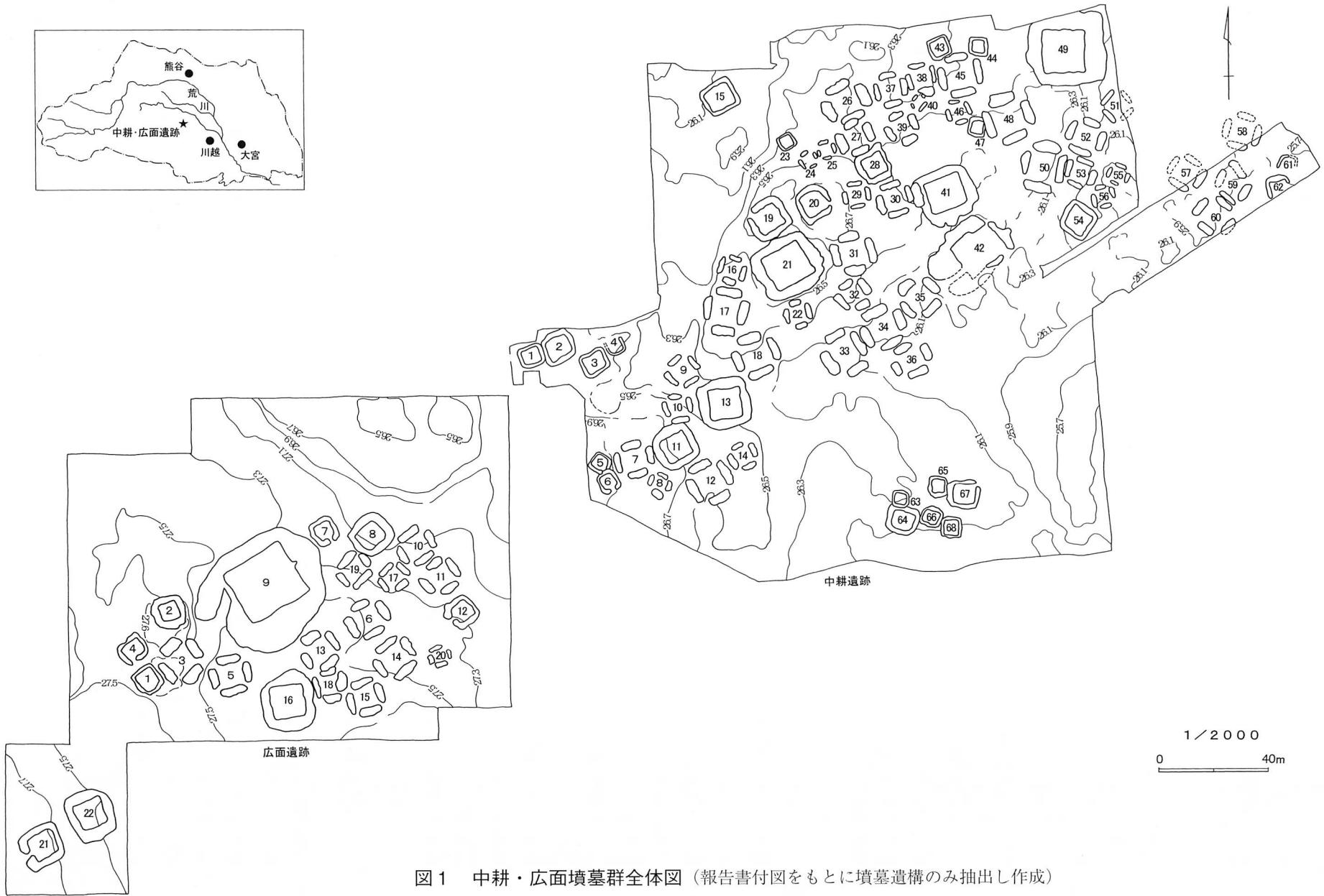
E形：D形の陸橋部分が長く発達した「前方後方」形

この分類により構成比率を整理すると、中耕68基の内訳は、推定の3基を含め、A形39（58%）、B形21（31）、C形4（6）、D形3（4）、E形1（1）、同様に広面22基では、A形12（54%）、B形5（23）、C形1（5）、D形4（18）、E形0である。

母集団の数は大きく異なるが、両者を比較すると、主体となるA形が5割強、次いでB形が2～3割である点はほぼ相似的である。相違点として、中耕でE形（S R 42）が認められる一方、広面にはそれがなく、D形の比率が相対的に高い点がある。ただ後者の中心的存在であるS Z 9は、D形としたがE形の中耕 S R 42（註1）と同向に陸橋が発達し、不整形ながらE形の特徴を見出すこともできる。

②規模 次いで、方台部上面（周溝内側上端に囲まれた平面）の面積を基準に遺構規模を数値化し（註2）、①と合わせて遺構群の傾向を整理する（表1左）。

中耕墳墓群では、最多であるA形の分布は10～130m²台にわたり、40・50m²台をピークとする多数派の小・中型墳、120m²台をピークとする少数派の大型墳のまとまりが認められる。数で次ぐB形では、20・30m²台を主体に100m²以下の小・中型墳が認められる点でA形と共通する一方、140m²を越え、250m²台まで点々と大型墳の分布が広がる対照的な傾向を示している。A形が示す100～120m²台の中型墳は見られず、小型墳のまとまりを重視すれば、大小の分離がA形に比べ顕著と言



える。C形も20m²台のまとまりが見られる一方、100m²を越えず、小・中型墳に限られる。D形は20m²台1基のみ。E形も1基だが、最大級の220m²台である。

広面墳墓群では、A形に100m²を越える分布が認められず、70~90m²台の中型墳が主体となっている。以下いずれも少数だが、B・D形に大型墳が見られる一方、全体に50m²を越えない小型墳の存在が中耕墳墓群に比べ希薄である。D形のみは、小・中型墳のまとまりと、540m²台に突出した大型墳の両者があり、少数ながら大小の別が鮮明である。中耕墳墓群に比べA・B形で大型群の存在が影を潜めている点と合わせると、大型墳の存在が特定墳（S Z 9）に集約化した状況と言えるかも知れない。

2 時期区分－報告書による編年案

データの整理を進めていくにあたり、まず中耕墳墓群編年案を確認しておく。なお広面墳墓群については、報告書以後編年案が示されていないが、中耕編年の中で言及されているため、それをとおして触ることにする。

中耕遺跡では、墳墓群形成に先行して集落が造営される。集落は、土器編年の新古2相に対応しI・II期に分けられる。墳墓群は、土器の型式相が集落のそれと一部重なりながら後続することから、同じくII~IV期に分けられる。造営開始が集落廃絶後であることが層位的に確認されていることから、その前後関係を反映させてII期を細分し、集落（新）をIIa期、墳墓群（古）をIIb期とする。以上から、中耕遺跡古墳時代前期遺構群の変遷は、I期（集落古）－IIa期（集落新）－IIb期（墳墓群古）－III期（墳墓群中）－IV期（墳墓群新）と整理される。

周辺遺跡資料との並行関係が例示されており、そのいくつかを挙げておく。

I期か若干先行：東松山市根平遺跡4号住居跡

II~III期：東松山市下道添遺跡A~D期

III期：下道添遺跡E期、東松山市根岸稻荷神社古墳

III期以降：東松山市五領遺跡C区6号住居跡

IV期かやや下降：下道添遺跡G期、五領遺跡C区46号住居跡（註4）

広域的には、I~IV期が愛知・廻間編年5~8期、墳墓群造営時期を、奈良・纏向編年を介して庄内式新段階を中心に一部布留式古段階に及ぶ。

3 墳墓群の細別と動態

①細別の方法（図2） 中耕墳墓群は、報告書において8つの小単位群に細分されている。その分析をたどりつつ、墳墓群内部の構造を確認していきたい。「周溝墓群中の形態による時間的な先後関係は、四隅切れ型が当該地域での周溝墓の初現型式で、全周型がその後出形態である。これは本遺跡でも同様の出現順序を考えてよく、土器の型式的な先後関係からも首肯できる。」（報告書151頁）ことがまず前提の柱として指摘されている。群内には時間的前後に連なる新古2相が重なっていることが確認され、これを背景として客観的な手がかりにもとづく小単位群の識別と、各群内での2相を主体とした時間的動態が整理されていく。手がかりとなるのは、《1》群としての空間的なまとまりと相互分離、《2》軸方向の近似、《3》層位的重複、《4》重複回避などである（この括弧数字は、後述において省略記号として使用する）。《1》・《2》は小単位群の範囲を視覚的に認識させ、《3》・《4》は遺構相互の先後関係を知らしめる。《3》は、先後関係の確定に最有力だが、限られた時間幅の中で次々と深い溝と立体的な墳丘を造営するのだから、先行遺構が眼中にな

いかの様な偶然的で明瞭な重複は起こりにくいだろう。事実、ここでの事例は多くない。むしろ客観性では《3》に劣るが、事例に恵まれ有力なのは《4》である。後発の墳墓が、近接する先行墳墓の周溝との重複を避けるために設計を便宜的に変形させた結果、遺構から先行遺構への意識が読みとれ、両者の先後関係が決定されることになる。そしてまで敢えて接近する背景には両者の親縁性が窺え、《2》のより積極的発現として捉えることもできる。

②各群の動態（表2・4）このような手続きを重ね見出された小単位群は、群形成の契機とみられる「起点墓」がⅡb期に造営され、以後Ⅳ期まで連続的に活動した群が主体的位置を占め、一方遅れてⅣ期に出現する群もある（表2）。全体としては、少数の単位群がリレー的に消長を繰り返すのではなく、複数の群が併行して活動し、全体像を形成していったようだ。広面墳墓群も、構成・配置がより整然とし、群としてのまとまりが強いために見えるが、SK9の規模における突出を除けば、中耕墳墓群との性格の違いを強調する材料はないように思われる。各群の内容は以下のとおり。遺構に関する表記は、「名称（墳形、面積、帰属時期）」とし、面積不明な場合は「*」を用いて表記する。

I群 [S R 1～4] 4基：微小さな谷地形によりⅢ群と《1》（前述省略記号、以下同）。S R 1 (B 39IV) は S R 2 (B 67IV) に対し《3》で後出。他に S R 3 (B 50IV)、S R 4 (C ? 23IV) がある。
II群 [S R 5～14] 10基：Ⅱb期でⅢ群に対し《1》。S R 12 (A 108 II b) を起点墓として、S R 14 (A 43III)・7 (A 78III)・9 (A 63III)・10 (A 48III) を経て S R 13 (B 132III)・11 (B 93IV)・5 (B 20IV)・6 (D 29IV) で終焉。S R 6 は S R 5 と《3》後出。S R 10・11も《3》だが新旧不明。S R 11・12・14・6 が《2》。

III群 [S R 16～22・31～36・42] 14基：S R 20・31・35とⅣ群 S R 24・29・30の間に空隙を認め《1》を想定。S R 34 (A 105 II b) を起点墓とし、周囲の S R 32 (A 53 II b)・33 (A 110 II b) と《2》、また S R 33・35 (A 88III)・36 (A 74III) は 34 に対し《4》であり、それぞれ後出。S R 21 (B 214 III)・22 (A 45III) との間の空隙から《1》を認め、この4基で小群形成。一方、S R 16 (A 48III)・17 (A 110III)、S R 18 (A 110 II b)・22・31 (A 94 II b)、S R 19 (C 89IV)・20 (C 73IV)・21 の3組で《2》が認められる。S R 42 (E 222IV) は位置づけが難しく、S R 34他の小群との間に《2》が認められるが積極的にⅢ群に含めることは保留とされる。

IV群 [S R 23～30・37～41・43～49] 20基：S R 27 (A 59III) は S R 26 (A 93III) と《3》で後出。S R 28 (B 63IV) は S R 27 に対し《4》であり後出。またこれらに S R 30 (A 73III) を加えた南北縦列の4基は《2》の関係で、S R 39 (A 53 II b) もやや離れるがこれに加わる。S R 27 から東西に連なる S R 25 (A 22III)・24 (A 20III) は、S R 27 が周囲に先駆け中核的存在となっていることから、27・25・24と西へ向かう造営順が想定される。S R 41 (B 170III) は S R 30 に対し《4》で後出。S R 23 (B 20IV) と S R 24、S R 29 (A 45 II b) と S R 25・30 は②が認められる。以上がⅣ群西半の小群を形成する。

東半では、S R 48 (A 127III)・49 (B 246IV) 間の空隙に《1》を認め、S R 37 (A 69III)・38 (A 59III)・40 (A 17III)・43 (B 40IV)～48を1小群とする。S R 47 (B 23IV) は S R 48 と③で後出。S R 38 は隣接する 40・45 (A 113 II b) に対し《4》であり後出。S R 43・46 (A 39III) も S R 45 に対し《4》であることから、S R 45 は周辺に先行する存在である。S R 37 と S R 38、S R 43・46 と S R 48、S R 44 (B 21IV) と S R 49 に《2》が認められ、群をまたいで S R 47 と S R 50 も同様である。

V群 [S R 50～56] 7基：S R 50 (A 125 II b) は S R 53 (A 57 II b) に対し《4》であり後出。S R 52 (A 82 II b)・53 と S R 55 (A 30III)、S R 51 (A・III) と S R 54 (B 72IV) で《2》が認め

中耕遺跡								広面遺跡	
I群	II群	III群	IV群	V群	VI群	VII群	VIII群		
II b 期		SR12(A) SR34(A) SR31(A) SR18(A) SR32(A) SR33(A)	SR29(A) SR45(A) SR39(A)	SR53(A) SR52(A) SR50(A)	SR58(A) SR59(A)			SZ13(A) SZ14(A) SZ19(A)	
III 期		SR 7(A) SR 8(A) SR 9(A) SR10(A) SR14(A) SR13(B)	SR16(A) SR17(A) SR22(A) SR35(A) SR36(A) SR21(B)	SR24(A) SR25(A) SR26(A) SR27(A) SR30(A) SR37(A) SR38(A) SR40(A) SR46(A) SR48(A) SR41(B)	SR51(A) SR55(A) SR56(A)	SR57(A) SR60(A)		SZ 6(A) SZ10(A) SZ11(A) SZ15(A) SZ17(A) SZ18(A) SZ20(A) SZ 3(A) SR 5(A) SZ 9(D) SZ 2(B) SZ22(B) SZ16(B)	
IV 期	SR 2(B) SR 3(B) SR 1(B) SR 4(C?)	SR 5(B) SR 6(D) SR11(B)	SR19(C) SR20(C) SR42(E)	SR23(B) SR28(B) SR43(B) SR44(B) SR47(B) SR49(B)	SR54(B)	SR61(B?) SR62(B?)	SR63(B) SR64(B) SR65(B) SR66(B) SR67(C) SR68(B)	SR15(B)	SZ12(D) SZ 7(D) SZ 8(B) SZ 1(B) SZ 4(C) SZ21(D)

起点墓

表2 墳墓小単位群別消長表

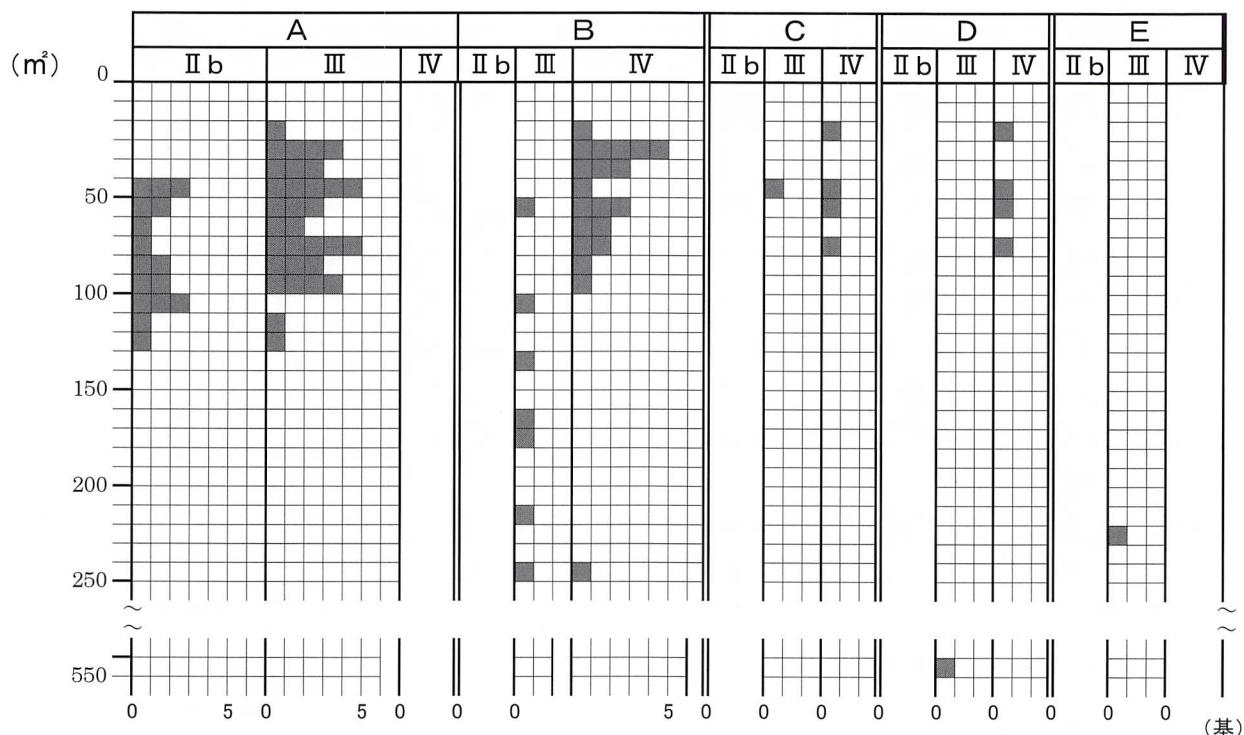


表3 墳墓形式・時期別規模分布表

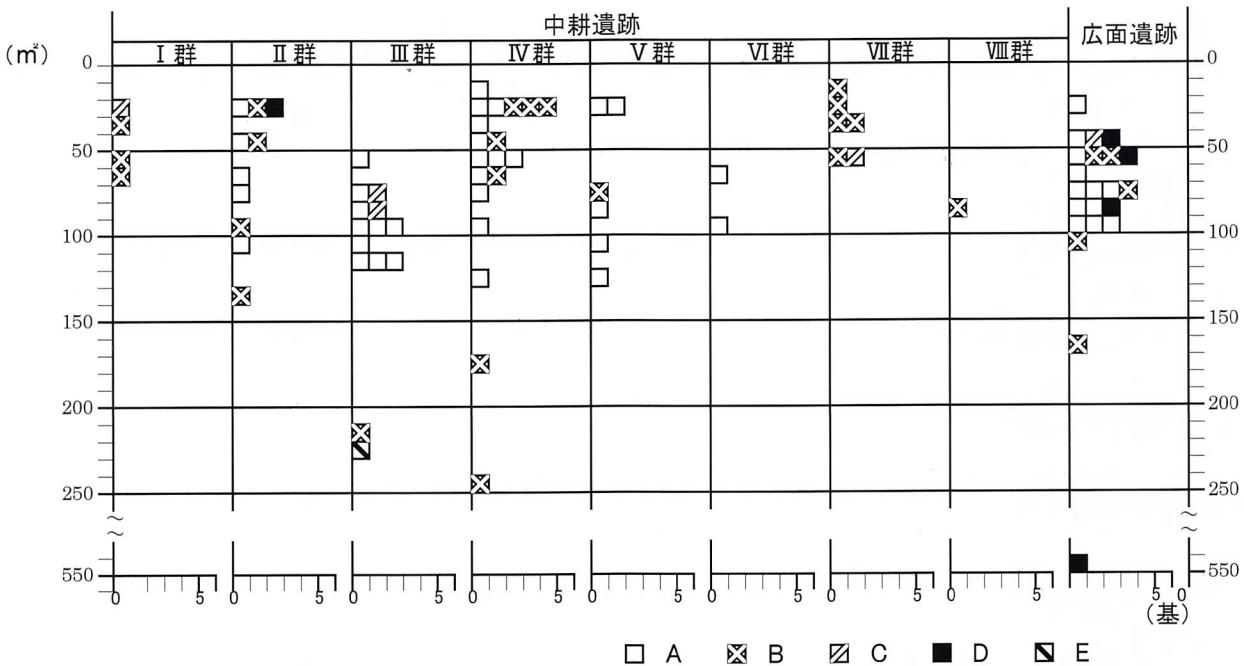


表4 墓小单位群別規模分布表

られる。S R 56 (A35Ⅲ) は軸方向が他と大きく異なる。

VI群 [S R 57~62] 6基：調査部分が限定されるため全体像は不明だが、現況が東限であることが確認されている。S R 60 (A99Ⅲ) は S R 59 (A68Ⅱ b) に対し《4》とみられ後出の可能性が指摘される。他に S R 58 (A * Ⅱ b)、S R 57 (A * Ⅲ)、S R 61 (B ? * Ⅳ)、S R 62 (B ? * Ⅳ)。
VII群 [S R 63~68] 6基：①の傾向が顕著な孤立的かつ集約的な分布を示す。S R 63 (B18Ⅳ)・S R 64 (B54Ⅳ)・66 (B30Ⅳ)・68 (B34Ⅳ) は一連で《3》だがいずれも相互に順序不明。同じく S R 65 (B26Ⅳ) は S R 67 (C59Ⅳ) と《3》で後出が確認される。

VIII群 [S R 15] 1基：S R 15 (B81Ⅳ) が単独で孤立的な立地をとる。

広面墳墓群 [S Z 1~22] 22基：最大の S Z 9 (D540Ⅲ)を中心とする20基と、南西に離れた S Z 22 (B103Ⅲ)・21 (D88Ⅳ) の2基の群に大別されるが、いずれも中耕墳墓群の分布に認められる北東-南西の中心軸を共有しており、空隙に隔てられているが、共通の秩序のもとに形成されたことが窺える。東側の主群も、S Z 9 の三方ごとに小群を形成しているように見える。事実関係を確認しておくと、S Z 18 (A52Ⅲ) が S Z 13 (A75Ⅱ b) と《3》で後出、さらに18は両脇の S Z 15 (A79Ⅲ)・16 (B161Ⅲ) を意識するかのような占地が報告されており、とすれば両者に対し《4》であり後出となる。また S Z 8 (B78Ⅳ) も S Z 19 (A63Ⅱ b) を避けた変形が認められ、《4》として後出が認められる。

中耕細分案での動きに従うと、Ⅱ b 期に S Z 13・14 (A92Ⅱ b)・19 が造営され、次いで東側に S Z 6 (A89Ⅲ)・10 (A80Ⅲ)・11 (A71Ⅲ)・17 (A46Ⅲ)・20 (A26Ⅲ)、西側に S Z 15・16・18・3 (A92Ⅲ)・5 (A93Ⅲ)・2 (B53Ⅲ)、そして S Z 9、離れて S Z 22 が出現する。次期では東外縁部に S Z 7 (D42Ⅳ)・8・12 (D54Ⅳ)、西側に S Z 1 (B50Ⅳ)・4 (C47Ⅳ)、最西端に S Z 21 が造営され、群形成は終息する。

③小結 以上おおまかにまとめると、中耕墳墓群では8小单位群が細別され、3期の時期区分の中でいくつかのパターンに分かれ展開する。

すなわち分布域の中心軸付近に展開するⅡ~VI群ではⅡ b 期に起点墓が造営され、以後、造墓が継続する。

Ⅲ期では、Ⅱ～Ⅳ群で造営基数が増加し、A形墳が引き続き主体だが、各群にB形墳が1基づつ出現する。一方V・VI群では造営基数が横ばいで、B形墳は確認されない。ただし両群は全貌が不明であり、現状での復原には限界がある。注意されるのは、Ⅱ～Ⅳ群のB形墳が、墳形で孤立的であるばかりでなく、規模においても各群で最大を占めている点である。

最終段階のⅣ期になると、各群からA形が姿を消してB形主体となり、C・D形が少數見られる。また、S R 42・49のように、墳形、規模における特定墳墓の突出が際だつ一方、I・VII・VIII群が出現し、群総体としての分布域は拡大（もしくは拡散）することになる。

広面墳墓群の展開では、Ⅲ期におけるSZ 9の出現により、中耕Ⅳ期の状況が先行してⅢ期に複合したような觀がある。もっともSZ 9の規模は中耕S R 42・49を凌駕しており、時期、群構成の両面から次稿で検討してみたい。

墳形・規模の両遺構属性について、小単位群の枠組から離れ、中耕・広面一体としての時期的変化をあらためて見直すと（表3）、Ⅱb期は、いわば中型A形墳期といえる（ここでの大小はごく相対的な表現で、あえて基準は設けない）。それでも80m²を境に大・小2種の別が窺える。Ⅲ期は、中・小型A形墳と大型B形墳の時期である。A形墳は引き続き数的主体であり、規模ではやや小型化の傾向が窺え、大型化は明らかに頭打ちである。一方、少數ではあるが100～250m²のB形墳が出現し、各小単位群において相対的大型墳となるのは先に見たとおりである。Ⅳ期は、中・小型B形墳と突出大型墳で構成される。A形墳は姿を消すが、B形墳が同じ規模を踏襲しており、少數だがC・D形墳もそれに重なる。突出大型墳は、それ自体の規模にも拠るが、小型墳との中間が空白となる事により、その隔絶が強調される。隔絶は、グラフ上の分布のみではないかもしれない。再び遺構分布図Ⅳ期に目を戻す（図2下）。S R 42・49は、それぞれ小単位群内で他の遺構との関連が見えず、その群に帰属させる理由付けはむしろ薄弱もといえる。そこでⅢ期以前の遺構を捨象しⅣ期の遺構分布に焦点を合わせると、S R 42・49から数10～100m以上の距離を置いて小型B・C・D形墳が分布する光景が形成される。Ⅳ期におけるI・VII・VIII群の出現は、それまでの小単位群の枠を越えた群構成再編の結果ではなかろうか。

4 土器の分類

①形式分類 遺構の周溝からは、壺類を中心に多数の土器が出土している。それらが遺構と有機的な関連を構成する遺物群として、いわば遺構の一部としての情報を有しているだろうことは想像に難くない。しかし現実には遺構の遺存状態は理想的でなく、失われた遺物が多数にのぼるであろう一方、遺跡が墳墓群直前に先行する集落と複合する構造である事から、遺構と無関係に混在する遺物の存在も懸念される。それらのノイズを克服し、葬送儀礼の実態に迫る事は、限られた選択肢の中で最有力な手段ではありながら、難事といえる。

本稿もそれを志向しつつ、第一段階として分類整理を準備する。対象として混入物の排除（帰属が「時期・時代的」に異なるものは別として）は意識していない。また二次的な滅失を見込んで、遺存状態の良悪は基本的に勘案せず対象とした。ただし点数が多い甕は例外とする。それらについて、以下の通り分類する（表5）。

言い訳がましいが、一定地域内で有効な分類網としてはより緻密な整備が必要だろうが、ここでは、論の身の丈に合った作業過程的なものにとどめる。視野は、当遺跡の墳墓出土土器に限られる。

・壺

単純口縁（A）：端部（口唇）に立体的な造作を取り付けないもの。面取りの有無があるが、それが顕著なものは壺Fとして別分類とした。概ね頸部高：器高 = 1 : 3 を境に、長頸（a）、

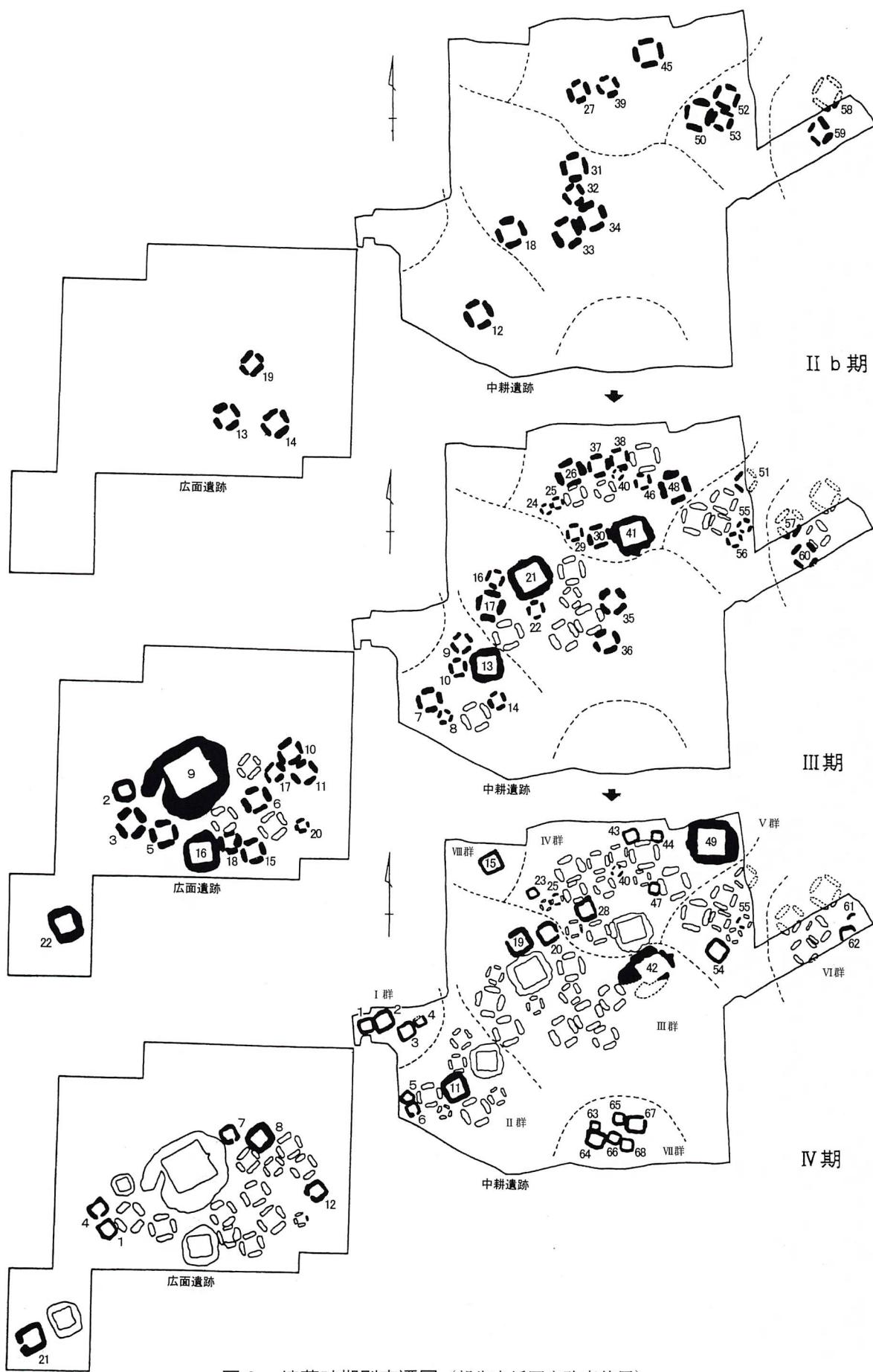


図2 墳墓時期別変遷図（報告書挿図を改変使用）

遺構名	面積	墳形	壺																								
			単純口縁(A)							折返し口縁(B)			重段口縁(C)			複合口縁(D)		有段口縁(E)			面取口縁(F)						
			a	b	1	2	3	4	5	6	7	?	1	2	3	4	5	6	7	?	1	2	3	4	5	6	7
SR40	17	A																									
SR63	18	B																									
SR 5	20	B																									
SR23	20	B																									
SR24	20	A																									
SR44	21	B	1	1																							
SR25	22	A																									
SR 4	23	C?																									
SR47	23	B																									
SR65	26	B																									
SR 8	27	A																									
SR 6	29	D	1																								
SR55	30	A																									
SR66	30	B																									
SR68	34	B																									
SR56	35	A	1																								
SR 1	39	B	1																								
SR46	39	A	1	1																							
SR43	40	B																									
SR14	44	A	1																								
SR22	45	A	1																								
SR29	45	A																									
SR10	48	A																									
SR16	48	A	1																								
SR 3	50	B																									
SR32	53	A	1	1																							
SR39	53	A																									
SR64	54	B																									
SR53	57	A	1																								
SR27	59	A	1																								
SR38	59	A																									
SR67	59	C																									
SR 9	63	A	1	1																							
SR28	63	B	2																								
SR 2	67	B																									
SR59	68	A																									
SR37	69	A																									
SR54	72	B																									
SR20	73	C	1																								1
SR30	73	A																									
SR36	74	A	1																								
SR 7	78	A	2																								
SR15	81	B																									
SR52	82	A	3	1																							
SR35	88	A	1																								
SR19	89	C																									
SR11	93	B	1																								
SR26	93	A																									
SR31	94	A	3																								
SR60	99	A	1																								
SR34	105	A	1	1																							
SR12	108	A	1																							1	
SR17	110	A	2	1																							
SR18	110	A																									
33SR	110	A	1																								
SR45	113	A																									
SR50	125	A																									
SR48	127	A	1																								
SR13	132	B	1	3	1																						
SR41	170	B	2																								
SR21	214	B	1	4	3	2																					
SR42	222	E	1		1	1																					
SR49	246	B																									
SR51	-	A																									
SR57	-	A																									
SR58	-	A	1																								
SR61	-	B?																									
SR62	-	B?																									

表6 中耕墳墓群出土土器遺構別一覧表

?	広頸壺						脚付広 頸壺	高杯		開脚高杯		小型器台			鉢		甕		甑	遺構名							
	単純口縁(A)			折返し口縁 (B)				A	B	?	A	B	?	A	B	C	?	A	B	台付							
	a	b	c					a	b	a	a	b	a	a	b	b			1	2	3	4	5				
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	?	1	2	3	4	1	2	3	4	5	?	1	2	3	4	5	SR40	
																									SR63		
																									SR 5		
																									SR23		
																									SR24		
																									SR44		
																									SR25		
																									SR 4		
																									SR47		
																									SR65		
																									SR 8		
																									SR 6		
																									SR55		
																									SR66		
																									SR68		
																									SR56		
																									SR 1		
																									SR46		
																									SR43		
																									SR14		
																									SR22		
																									SR29		
																									SR10		
																									SR16		
1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	SR 3		
																									SR32		
																									SR39		
																									SR64		
																									SR53		
																									SR27		
																									SR38		
																									SR67		
																									SR 9		
																									SR28		
																									SR 2		
																									SR59		
																									SR37		
																									SR54		
																									SR20		
																									SR30		
																									SR36		
																									SR 7		
																									SR15		
																									SR52		
																									SR35		
																									SR19		
																									SR11		
																									SR26		
																									SR31		
																									SR60		
																									SR34		
																									SR12		
																									SR17		
																									SR18		
																									33SR		
																									SR45		
																									SR50		
																									SR48		
																									SR13		
																									SR41		
																									SR21		
																									SR42		
																									SR49		
																									SR51		
																									SR57		
																									SR58		
																									SR61		
																									SR62		

遺構名	面積	墳形	壺																	
			単純口縁(A)							折返し口縁(B)			重段口縁(C)			複合口縁(D)	有段口縁(E)	面取口縁(F)		
			a	b	1	2	3	4	5	6	7	?	1	2	3	4	5	6	7	?
SZ20	26	A																1	1	
SZ 7	42	D																		
SZ17	46	A	1	2																
SZ 4	47	C																1		
SZ 1	50	B	1	1																
SZ18	52	A																		
SZ 2	53	B	2	1			1													
SZ12	54	D	1															1		
SZ19	63	A		1								1								
SZ11	71	A	1																1	
SZ13	75	A	1														1			
SZ 8	78	B			3								1	1						
SZ15	79	A	1		1															
SZ10	80	A	1			1	1	1	1				1					1	1	
SZ21	88	D	1										1					1		
SZ 6	89	A	1																	
SZ 3	92	A					1									1				
SZ14	92	A	1	1			1	1						1						
SZ 5	93	A	1																	
SZ22	103	B		1		1		1										1		
SZ16	161	B				1														
SZ 9	540	D		1	1										1			3	1	

表7 広面墳墓群出土土器遺構別一覧表

短頸（b）に分ける。

折返し口縁（B）：端部に粘土帯を一段貼り付け、文様帶として立体化させたもの。文字通りそうしたもの、貼り付けを省力化し下半の段差のみ表現したもの等がある。粘土帯の広狭で大別され、幅広で壺Dに近い形態が多いのがここでの特徴的傾向である。

重段口縁（C）：吉ヶ谷式に由来する、後円部の粘土帯が複数段積み上がって見えるもの。単位の数と強調の度合いで細別される。名称は形象による造語である。

複合口縁（D）：外反した口縁端部に、ほぼ直立した幅広の粘土帯が取り付けられる。南関東の典型例では、壺Bに対し断面の屈折が明瞭である。ここでは存在が希薄で、壺B・Eの影響下で形式の独立がおぼつかないように見えるのがむしろ特徴的である。

有段口縁（E）：外反（屈折）した口縁部に斜傾した粘土板を取り付けた、畿内第V様式由来の複合口縁壺。壺Dと弁別するためこの名称を採る。「二重口縁壺」の名称も一般的。

面取り口縁（F）：別個の部位を取り付けない点で壺Aに共通するが、端部の面取りが明瞭で、結果的に上端断面が角状に突出する。東海地方以西の型式に由来する。

・広頸壺：壺類に比べ頸部が広く、総体的に底部径を大きくしのぐ。「広口壺」に同じ。

単純口縁（A）：長頸（a）、短頸（b）とともに、吉ヶ谷式壺（甕）に由来するとみられる長胴（c）を分ける。A aは小型丸底土器（壺・埴）と重なりを持つ。

折返し口縁（B）：南関東一帯で通有な形式。墳墓出土は1点のみである。

・脚付広頸壺：広頸壺A a小型品に脚がついたもの。

・高杯：杯部が有稜（a）と鉢形（無稜）（b）に分ける。（b）には小型品もある。

・開脚高杯：高杯に対し脚裾径が受部径をしのぐ。通称される「小型高杯」に同じ。高杯と同じ

?	広頸壺						脚付広 頸壺	高杯	開脚高杯	小型器台	鉢	甕	甕	遺構名						
	単純口縁(A)			折返し口縁 (B)				A	B	?	A	B	?	A	B	C	?	A	B	
	a	b	c					a	b		a	b		a	b		a	b		
1 2 3 4 5 6 7	1 2 3 ?	1 2 3 ?	1 2 3 4	1 2 3 4 5 ?	1 2 3 ?													1 2 3 4 5		
			1																SZ20	
1	3	1					1				2								SZ 7	
											1								SZ17	
												2							SZ 4	
			1									1							SZ 1	
1	1						1				2	3	2			1			SZ18	
	1																		SZ 2	
		1	1							1									SZ12	
																			SZ19	
																			SZ11	
												1	3	1					SZ13	
		1	2							1		2	3	1			1		SZ 8	
																			SZ15	
1	1	1								1			3	1					SZ10	
	2	1										2							SZ21	
								1				1							SZ 6	
		2							1	1	1		2						SZ 3	
		1	1						2	1	1		2	1	2				SZ14	
1	1	1	1						1				1						SZ 5	
																			SZ22	
1																			SZ16	
1	1		1	1						2			1	1					SZ 9	

基準で (a) · (b) に分ける。

・小型器台：受部の形状により、下部有稜（a）、無稜（b）、端部面取り（c）に分ける。包括的にはさらなる分類が必要だが、ここでは見送る。

・高杯状器台：受部に高杯状の造作を施したもの。その形状により細分可能。「装飾器台」等複数の別称あり。

・鉢：浅鉢（皿）形（A）、深鉢（椀）形（B）があり、それぞれを単純口縁（a）、屈折（有段）口縁（b）に分ける。鉢A aは、体部が浅い小型丸底土器と重なる。

・甕：南関東では、平底甕と台付甕の2者があり、北・東関東では平底長胴甕が主体となる。当遺跡では台付甕に限られており、吉ヶ谷式由来の長胴甕を含め平底甕が見られない。ここではアルファベットによる細分は省略する。

・甕：当該期では複数の形式が存在するが、出土は1点のみで細分は省略する。

②法量による区分 機能上、容積が重要な属性となる貯蔵具、煮沸具について、以下の通り法量による区分を設ける（註3）。

1類：器高15cm未満

2類：器高15～20cm未満

3類：器高20～25cm未満

4類：器高25～30cm未満

5類：器高30～35cm未満

6類：器高35～40cm未満

7類：器高40cm以上

概念区分は以下の通りとする。

小型品：1・2類 中型品：3～5類 大型品：6・7類（註4）

なお、表1においては、個体の不全により①、②のいずれかが不明なものについては「？」として分類表示した。

壺						
単純口縁 (A)		折返し口縁 (B)	重段口縁 (C)	複合口縁 (D)		
長頸 (a)	短頸 (b)					
壺						
有段口縁 (E)		面取り口縁 (F)	単純口縁 (A)			
長頸 (a)	短頸 (b)	長胴 (c)				
広頸壺		鉢				
脚付広頸壺		浅鉢形 (A)		深鉢形 (B)		
折返し口縁 (B)	脚付広頸壺	単純 (a)	屈折 (b)	単純 (a)	屈折 (b)	
高杯		開脚高杯			高杯状器台	
有稜 (A)	無稜 (B)	有稜 (A)	無稜 (B)			
小型器台			甕		瓶	
有稜 (A)	無稜 (B)	面取り (C)	台付	その他		
				(平底) (長胴)		

表5 土器分類表

5 遺構の属性と出土土器の関連

遺構ごとの出土土器群のあり方に視点を移す。遺構属性として、これまで手がかりとしてきた墳形・規模を基準に、伴出する土器群との対応関係について概観してみたい（表3・4）。言うまでもなく、遺構と出土土器の関係は、現位置据え置き、原位置からの落下、投入、破碎廃棄、偶然の混入等、土器の出土状況を介して一様でないことが知られる。その解読作業を経なければ、共伴遺物のセット論はおぼつかない。次稿の主たる課題の1つがそれであり、表3・4は、その作業前のあり方を示している。

表では、縦列に遺構を規模（方台部面積）の小さな順に配列してある。遺物の頻度は、表の上位に位置する小規模墳では希薄で、まず単純口縁壺・広頸壺小型品、小型器台など小型の土器が散見される。規模を追う毎に中・大型品も加わり出現頻度は高くなるが、その傾向がはっきりするのは90m²級以上で、とりわけS R13・41・21等で充実ぶりが際だっている。これら大型墳が、Ⅲ期において中耕Ⅱ～Ⅲ群の中核的存在であることは3節で見たとおりである。Ⅲ～Ⅳ期は、規模において格差が顕在化する傾向が窺えたが、Ⅳ期に数的主体となる50m²級以下の小型墳では、Ⅲ期の小型A形墳以上に遺物の僅少さが鮮明であるように見える。規模の格差は、土器を主体とする遺物にも反映されているようだ。

遺物量ばかり問題にしたが、個々の土器形式がそれぞれに在来あるいは外来由来の地域型式を纏うとともに、供献土器としてシンボリックな性格と役割を担っていることは言うまでもないだろう。壺Cや広頸壺A cなど貯蔵形態土器に吉ヶ谷式土器の特徴を如実に示すものが見いだされる一方、壺A a・広頸壺A aなどの中・小型品や開脚高杯、小型器台等は、群として新出の様式を示しつつ、供献土器群の一翼を占めている。次稿への架け橋として注意を惹くものをいくつか挙げると、煮沸形態の甕は、表では比較的遺存状態の良いものを拾って登載したが、葬祭儀礼に参加したとみられるものも少なくない。それを含め、甕は台付甕ばかりであるという。また供膳形態土器群に含まれる脚付広頸壺は、大型墳に偏って出土しており、そもそも古墳時代前期の脚付小型土器の性格に、実用性からはみ出た特殊性が窺える点と合わせ注目される。

（以下次稿）

註

（註1）図から平面形を認識するには遺存状況がすこぶる悪く、「前方後方形」としての可能性は認められながら、それとしての取り扱いはしばしば留保されている。ここでは報告書の復原案に従いE形としておく。南西側周溝の発達から見て、少なくとも他の形である可能性は低い。

（註2）報告書平面図をプラニメーターで計測した。本来的な面積は、方台部下端（周溝内側下端）線内に求められるべきだが、図上での認識が確実な上端線にあえて拠った。ゆえに、数値はいずれも本来的なものより小さくなっている。また、B形以外の周溝が中断する形では、図上把握される四辺のラインを陸橋部へ直線的に延長し、結果閉じられた略四角形内部の面積をそれにあてた。ゆえにD・E形の場合、陸橋部分の面積は全く含まれていない。この様な操作であるから、得られた数値は小数点以下四捨五入し概数として扱う。

なお中耕の場合、報告書にすべての遺構を対象とした面積を含む詳細な計測表が掲載されている（314～318頁）。面積については計測方法の詳細が不明なため、本稿では自らの基準で敢えて再計測した。多くの報告書では、遺構規模は特定部位の線長（主軸長、幅等）でのみ示されており、面積は以外に等閑視されている。必要性がより認識されるべきデータである。

遺構（平面）規模の数値化を方台部に限定する方法については、周溝形態を重視する立場からの批判が考えられる。当遺跡では、同形式墳でも周溝形態にはらつきがある。端的な例では、方台部面積が同じでも周溝幅が異なれば、周溝外縁内面積には大きな差が生じうる。当遺跡A形墳の平面形を土壙の四辺配列形と見る大屋道則は、土壙が構

円形か長方形かにより、（方台部の平面形は同じでも）墓の外郭線に円と方の違いが生じ、それが墓の景観と祭祀を規定した可能性を指摘する（大屋1991：4～5頁）。一方、広面の報告者である村田健二は、「周溝墓の平面形の特徴は、方台部が直線的に設計されている反面、外周部は総じて不整形を呈する。これは、古墳の構築法とは異なり墳丘の盛り土が全て周溝掘削時の排土を拠所としている点であり、周溝の形状を整える目的は方台部を削り出した時点で終了している。つまり周溝の形状を整えることは二義的なものに過ぎないことを意味している」（『報告書』134頁）として対象的見解を示す。後に福田聖は大屋の見解を評価しつつも「大屋のこの視点は、周溝の平面形から方形周溝墓全体の構造の差異を推定する優れた方法として高く評価できる。しかし、このような外周形態を相対的な円形、直線的な方形として対置することは実際には難しい。『関東の方形周溝墓』所載の遺跡でこの所見を適用できるのは、今のところ入西遺跡群しか見当たらないようである」（福田2000:138頁）とその限界を指摘している。大屋の意見は理知的で示唆に富むが深読みのきらいを拭えず、むしろ村田の機能的見解が実際を言い当てているように思える。ゆえに、面積の設計的根拠に乏しい、つまりそれが不作為的に変動しうる周溝部分は、規模の算出基準から捨象するのが適当と考える。

（註3）ここでは供獻土器としての見かけの大きさを問題としているためこれで良い、という言い訳もあるが、本来の機能を問題とするなら容積の数値化が必要だろう。

（註4）中耕編年では、土器の法量を属性の主体とした形式分類を用いている（杉崎1993:281～300頁）。壺の場合、「大・中・小形壺」が形式分類の大柱に立てられ、その下に口縁部を形式素とする形式列が並んでいる。法量の別は形式の本来的性格（実用的用途）を忠実に反映していると考えられ、実用の動向を比較的性格に反映できる点で優れている。他方、鍵となる形式素を共有する土器が、法量にもとづき別形式に分類され、アルファベットによる形式名称からは相互の関連が読み取れない、現象的には形式名が多くなり煩瑣であることが欠点と言えるだろう。

（註5）他に、同遺跡A区1号住居跡の資料も同期として例示されているが、この資料は著名ながら同一遺構一括品であるか根本的に疑問がある。資料は目下所在不明だが、新たな検証をへてそれが払拭されるまで基準に用いない方がよいと考える（石坂2005）。

引用・参考文献

論文等

石坂俊郎2005 「五領遺跡出土土器の今昔」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』27号

大家道則1991 「方形周溝墓觀察の一視点（1）」『研究紀要』8 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

及川良彦1999 「関東地方の低地遺跡の再検討（2）－「周溝を有する建物跡」と方形周溝墓および今後の集落研究への展望－」『青山考古』16号

福田 聖2000 『方形周溝墓の再発見』ものが語る歴史3 同成社

同 2001 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（5）」『埼玉考古』36号

埋蔵文化財発掘調査報告書

西口正純1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書62集

杉崎茂樹1993 『中耕遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書125集

村田健二1990 『広面遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書89集